

## 編集後記

編集長 東野 定律

先日3月11日で東日本大震災の発生から7年を迎えた。被災地では復興住宅や商業施設も完成し、土地の整備、防波堤などの建設が行われ徐々に元の姿に戻ろうとしている場面がメディアで報じられる中、いまだに多くの被災者が被災地を離れたり、仮設住宅での不自由な生活を余儀なくされている。被災地の方々の生活が完全に元の姿に戻るのはまだまだ道が長いという印象を受けた1日だった。

さて、本稿で取り上げられた「合併旧町のレジリエンスー南三陸町歌津地区を事例にー」は、東日本大震災で被災した自治体内の旧町村、集落などの自助、共助について言及した論文であり、実際に被災された地域の実情から新たな街づくりを展開するという復興過程にアプローチした論文である。また、「大規模災害向けの災害ボランティア本部情報共有システム」の内容については、地震などによる災害が起こった際の情報をどのように共有するべきかという成果を示したものであり、どちらも今後の静岡県の地震対策においても大いに期待できる内容であるといえる。

こうした災害から得られる知見を次世代を担う若者に伝え、そして、地域の発展に寄与する研究を今後も展開していきたいものである。